宣教の声
The Voice of Mission
海外邦人、欧州諸国、
および迫害下にある聖徒への宣教
2022年 2 月号
No. 473

ウクライナ共和国チェルノブリで伝道するマイボロナ伝道師

ミッション・宣教の声 主幹
黒田 禎一郎

鹿のように生きる

鹿が谷川の流れを慕いあえぐように
神よ 私のたましいはあなたを慕いあえぎます。
詩篇42:1

鹿は荒野で生き延びるために谷川の流れを慕いあえぐように、キリスト者は険しい世の中で生命の根源である神を慕い求める必要があります。私はイスラエルの現地ガイドから、「荒野の鹿は10kmも離れた所でも、水源がどこにあるかわかる」と聞いたことがあります。詩篇42篇の作者は外的圧迫と霊的スランプという絶望と不安の中でも、打ち勝つ望みを知っていました。彼は谷川に流れる水に力があることを知っていました。その水は停止水ではなく流水であり、神が臨在された清流であったことを経験した時のことを思い起しました。そして今一度、神との深い交わりを慕い求めました。

私たちも人生において神が遠く感じられることがあります。霊的に満たされていた過去と比べ、ますます心を痛めることもあります。しかしそのような時こそ、うなだれているのではなく、神の祝福にあずかった先人（聖徒）たちを思い起こすべきです。苦難に打ち勝つ力は、神の助けを信頼するときに生まれます（信仰）。世の人々は、神はどこにいるかと詩篇作者を虐げました。神は苦難の中で御顔をしりぞけ背けておられるように思えた時がありました。しかし彼は、人が倒れる要因は外からの環境によるというより、神の助けに対する「不信仰」であることを悟りました。不信仰は失望をもたらし、聖徒をゆさぶる脅威です。敵の攻撃を受けて霊的に落ち込んでいるならば、自発的にみことばを読むことです。勝利を得た聖徒たちは例外なくそのような道を通りました。

神への信仰と賛美の真価は、苦難の時に現れます。「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように　神よ　私のたましいはあなたを慕いあえぎます。」先人たちは光り輝く昼のような時も、暗い人生の夜にも、神を待ち望みました。そして神をほめたたえました。私たちはここで2つのキーワードを見ることできます。一つは「谷川の流れ」です。水は停止すれば汚れますが、流水はいつも水をきれいに保ちます。イエスは「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」（ヨハネ7:38）と言われました。流れ出る水を飲めることができるのは、神を信じる者に与えられる特権です。もう一つは、「慕いあえぐ」です。人間は苦難や試練、そして病等を通して、霊的渇きを覚えて「慕いあえぐ」ものです。神を信じる者は、たとえ霊的試練に置かれても出口は見えます。それは全能の神が聖徒とともにいてくださるからです。勝利するキリスト者は、鹿が谷川の流れを慕いあえぐように神を慕いあえぐ人です。

海外邦人宣教（特別編） 宣教40年

ミッション・宣教の声　主幹
黒田禎一郎

“みことばを宣べ伝えなさい。
時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。
忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、
責め、戒め、また勧めなさい。”
IIテモテ4:2

1981年12月、「ミッション・宣教の声」の働きが始まり、あれから40年の年月が経過しました。この長い期間、私たちに与えられたミニストリーである海外邦人宣教は、どのように移り変わってきたのでしょうか。そして今後、このミニストリーはどう発展していくのでしょうか。今号では、海外邦人宣教特別編として、40年を機に立ち止まりその軌跡と展望を考えてみたいと思います。

召命と献身

先ず、私自身が海外（ドイツ）へ渡ったのは1970年春でした。当時は日本経済が右肩上がりの好成績時代で、日本製品は非常な勢いで海外へ輸出された時代でした。当然のことながら、経済の波に乗り駐在ビジネスマンは増えていきました。レイマンであった私は駐在員とその家族が増加するデュッセルドルフで、福音宣教の急務を痛感する中、主から召命をいただき献身させていただきました。それは1976年6月のことで、欧州初の日本語教会（日本語で説教がなされ聖礼典が行われる）となったデュッセルドルフ日本語キリスト教会が生まれました。当時、ドイツに滞在していた多数の邦人層はビジネスマンとその家族、そして医学、大学（音楽、哲学）などの留学生と研究者が主でした。当時はまだ国際結婚する方々はそれほど多くはありませんでした。

グローバル化世界へ

その後、政治、経済の動きは激変しグローバル化へと進む中、海外在住邦人層も変わっていきました。多数の邦人が、北米、欧州、アジア、オセアニア、アフリカと世界各地へ移り住むようになりました。仕事や留学で海外へ赴任するだけでなく、遊学で海外へ出かける人々、ワーキングホリデー・ビザで出かけ異文化生活を楽しむ青年層も現れてきました。今では日本人が居住していない国は珍しくなりました。国際化の促進は、それまで限られた人々が海外へ出かけていた時代から、誰でも海外へ行ける時代にシフトしました。その中で、現地で出会った人と国際結婚する邦人も次第に増えてきました。

このように海外在住邦人宣教は時代とともに様変わりしてきましたが、宣教ターゲットは邦人で何ら変わりはありません。外務省が昨年6月に発表した海外在住邦人数は135万7,724人でした（現在はコロナ禍でやや減少）。彼らへの福音宣教は、今も急務です。一説によれば、海外でイエス・キリストを信じクリスチャンとなる人数は、日本国内の受洗者数より多いと言われます。今では誰でも、どこでもキリストの福音を聞くことができる時代となりました。ここに宣教原則を記させていただきますので、応用は各自が主のお導きに従い進められますよう祈ります。

海外邦人宣教の勧め

使徒パウロはローマの獄中から、エペソにいた愛弟子テモテへ書簡を送り「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。」と勧めました。福音宣教は、いつの時代でも行うべき大切な務めです。国内宣教の重要性とともに、海外在住邦人への宣教も軽視してなりません。私は次のように理解しています。

①海外在住邦人は福音を受け入れ易い環境下にある

地域差はありますが、一般的に日本人は心が閉鎖的であると言われます。それは長年の文化、習慣、伝統からくるものがあるからでしょう。最近の都会では少しずつ変化してきましたが、日本社会はまだまだ閉鎖的です。しかし海外ではそのような壁がありませんから、日本人の心は解放され、創造神に対し心を開き易い環境に置かれます。それは福音宣教の絶好のチャンスです。

②第1次宣教圏（同一言語と同一文化）はもっとも有効である

同じ文化と言語圏で、第一言語である母国語のメッセージは心の深い部分にまで届きます。それはとても大きな恵みです。イエス・キリストの愛が心深くまで入るのは、第一言語で経験できる祝福です。ですから母国語での福音宣教は大変有効です。

③ぶどう畑には働き人が必要

海外在住邦人が世界中に散っている今、ぶどう畑はもはや色づき収穫直前の時期です。イエスは「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」（マタイ24:14）と言われました。国際化の進展とSNS等の通信機器開発が進み、今では福音が届かない所は世界で少なくなりつつあります。畑は色づいていますから収穫のための働き人が求められています。いかがでしょうか。あなたにも「宣教の声」は聞こえませんか。

伝道、プレゼントにもおすすめです。
聖書の集い・連続メッセージ
「讃美歌詩・聖歌詩の背景から学ぶ信仰」
第1巻〜第8巻 刊行
多くの人たちに親しまれている讃美歌詩・聖歌詩の背景にある作詞者の信仰に焦点をあてる励ましのメッセージ集です。
中綴じB6サイズ ¥500（税別）
ご注文は「ミッション・宣教の声」事務局まで。
その時、わがたましいは歌う
ミッション・宣教の声 主幹 黒田禎一郎

海外伝道シリーズ

旧東ヨーロッパの教会と信者は今

165

モルドバ共和国

黒田禎一郎

「子どもたちを正しい道へ導くには、どうすれば良いか」という問いは、モルドバ共和国ジンゲライに住むワシリー・コソヴァン兄弟にとって長年の課題でした。事の始まりは彼が導いていた日曜学校でした。子どもたちは神のことばを喜んで聞き、ゲームを楽しんでくれ、次第に子どもたちの参加人数は増加してきました。その頃集まった子どもたちは家庭に恵まれない子でした。彼らは片親（あるいは両親）を無くした極度の貧困家庭の子どもたちでした。そのような運命にある子どもたちへのケアは、日曜学校だけで担うには大きすぎる課題でした。当然ながら、教会全体として取り組むべきテーマです。それから1980年の後半になり、コソヴァン兄弟は２人の実兄弟の悲劇的な死を迎え、甥と姪の子どもたちを家に迎えることになりました。このようにして彼の家族は大家族となり、教会も部屋数が不足するようになりました。このようにして「子どもセンター・エリム」の働きは、その頃から始まりました。

子どもセンター・エリム

1990年の初めごろ、日曜学校には70人を越える子どもたちが集まるようになり、子どもたちが集える建物が必然的に必要となりました。丁度その頃、ドイツの宣教団体「フリーデンズ・ボーテ」から経済支援を受け、「子どもセンター・エリム」が建てられました。新築されたエリムには、多くの子どもたちが集まりましたが、空腹状態の子どもが実に多数いました。そこで教会の数人の姉妹たちが昼食準備のため、献身的に奉仕し、子どもたちをケアーすることになりました。そればかりか、ドイツから届いた古着（衣服）や靴などの生活必需品の仕分けがなされ、子どもたちの必要に応じて分配されました。そのような中で、神のみことばが常に語られました。彼らの多くは親や親族から捨てられた子どもたちで、エリムを通しての働きは大変よい証となりました。

子どもたちは、いわゆる社会的孤児（酒や遊びに溺れている親の子ども）と呼ばれ、養育者がいません。その上一部の親は外国に出稼ぎに出て、家にはいない状態でした。家に残ったのは年老いた祖父母ばかり、親族も社会的孤児の面倒を見ようとはしない状況でした。ソ連邦が崩壊した1990年代は、そのような親が急増していました。出稼ぎに出た一部の人たちは現地でパートナーに会い、再び祖国に戻ろうとしないケースもありました。路上に放り出された子どもたちは、「ストリート・チルドレン」となり、途方に暮れる日々を過ごしていました。

教会に集まった子どもたち

実を結ぶエリムの働き

子どもたちへのケアで最も困難なのは、子どもたちの道徳心とその精神面の教育でした。そのような社会環境に置かれた子どもたちの心は疲弊し、善悪の正しい基準を持つことが難しい状態でした。しかしイエス・キリストの愛は、そのような子どもたちの荒んだ心を少しずつ変えてくださいました。そして最も大きな祝福は、みことばによって心が養われ、子どもたちが神を信じるようになったことです。このような子どもたちへのケアは、約30年間休む間もなく続けられてきました。この働きには、教会の兄弟姉妹の献身的奉仕があったことは、決して忘れることはできません。教会に隣接するエリムには、近隣19の村々から約350人から400人の子どもたちが集まっています。彼らを送迎するバスも教会の兄弟が運転奉仕しています。

エリムにおいての神の祝福は、子どもたちだけでなく、教会も成長してきたことです。子どもたちが変えられ成長していく姿を見た他の親類の人たちが心を開きはじめ、教会に足を運ぶようになりました。コロナ禍で現在は集まることに制限が課せられていますが、50人以下は許されています。一同に集まることはできませんが、子どもたちの物心へのケアは、コロナ禍でも続けられています。

パンを食べる孤児

神の祝福

ワシリー・コソヴァン兄弟は、「私たちの働きは児童伝道に留まることなく、青年、大人伝道にもある。」と語っています。青年や大人たちの多くは、金銭主義の奴隷となり、酒や快楽に溺れ生きる目標を見失っています。しかし金銭では解決できない心の問題を、聖書の神は解決へと導いてくださることを、大人たちが気づき始めるようになりました。とくに大きな喜びはこの3年来、イエス・キリストを救い主と信じ、洗礼を受ける人々が多く起こされきたことです。それにエリムの働きを通し、かつては路上生活を送っていた孤児が、今では成長し教会の執事や長老となっていることです。これは筆舌に代え難い大きな喜びです、とコソヴァン兄弟は証ししています。今も生きて働かれる神は、このようにしてモルドバの地で栄光を現してくださっています。どうぞエリムの働きを祈り覚えてください。（つづく）

送迎するエリムのバス

霊とまことの礼拝者たち

たったひとりの悔い改めから

かつて平壌は、東洋のエルサレムと呼ばれていました。平壌がそう呼ばれたきっかけは、たった一人の悔い改めから始まりました。平壌にあったチャンデヒョン教会のリバイバル集会で、一人の長老が会衆の前に進み出て、涙ながらに罪の告白をしました。その日、彼の悔い改めから教会全体に聖霊が臨みました。それから人々が次々と会衆の前で罪の告白をし、出席者のほとんどが、深夜遅くまで悔い改めの祈りを捧げました。この出来事は1907年「平壌大リバイバル」と呼ばれ、一人の悔い改めが火元となり、やがては朝鮮半島全土にまで聖霊の炎が燃え広がりました。1948年、朝鮮半島は南北に分断され、北朝鮮は金日成が政権を握りました。金日成自身、キリスト教と親しい環境で生まれ育ったにもかかわらず、聖徒たちを激しく弾圧しました。崇められるべき創造主を神の地位から引きずり下ろし、金日成自らが神の座に居座りました。リバイバルが起こり、約3000人が集っていた教会堂は取り壊され、教会跡地に我こそが神だと誇示する如く、高さ23メートルにわたる金親子の偶像がそびえ立ちました。北朝鮮で見られた燃えるような信仰の炎は、一気に揉み消されたかのように思われました。けれども、その炎は今まで一度として絶えることなく、静かにくすぶり続けてきました。

北朝鮮教会といえば、厳しい迫害による苦難と地下教会の聖徒たちの殉教に関する悲しい話ばかりが、浮き彫りにされます。北朝鮮キリスト者たちはこれまで一度として、信仰の自由を享受する体制に生きたことがなく、自由と人権の概念すら知りません。けれども、彼らは自分たちのおかれた定めを嘆くことなく、へりくだった心で常に真の神にひれ伏し、神を称えながら生きています。また、彼らは神の北朝鮮に対する不屈の愛と、全てにおいて勝利者なるイエス様が強い味方であることを知っています。神から受けた祝福を自分たちだけで止めることなく、大胆に福音を伝えるキリストの兵士となっています。闇市では聖書が配られ、国境を通じても聖書が密輸され、地下教会が増え広がりました。昨今でこのコロナ禍においては、家庭内でリバイバルが起こっています。

人から人へと灯る神の愛

北朝鮮には三種類のキリスト者たちの存在が見られます。第一のキリスト者たちは、自由民主主義文明を受け入れた日帝時代に、生ける真の神を信じた人々とその子孫たちです。金政権により彼らの信仰生活は完全に踏みにじられ、表に出すことはできず、その子どもたちにも信仰を教えることは困難でした。しかし、神は彼らの祈りを聞かれました。神の力を侮っていた独裁者が、たとえ親たちの信仰を切り落としたかのように思えても、その信仰は切り株のように、密かに2、3世代にわたり継がれていきました。彼らは表向き平凡な労働者として、また、医師や学者、軍人や幹部としての顔を持つ傍ら、信仰の継承者として生きています。

第二は90年代の大量餓死と脱北者が最も多い時期に、外部から伝えられた福音を聴き、キリストを受け入れた人々です。彼らは主に中国で、宣教師たちや朝鮮族の伝道師を通して救われました。脱北し、中国や大韓民国に移住したものの、結局は福音を持って、故郷に舞い戻りました。中には中国公安に捕まり、信仰を持ち続けたまま強制送還された人々もいます。このようなキリスト者たちは、我が身を顧みることなく、ただその愛ゆえに生命を賭けた神の語部となりました。

第三は切り株なる信仰の継承者と、外部から流入した信仰の影響を受け、キリストに出会った人々です。彼らは家族や親戚や友人、知人を通してイエス様を知りました。彼らは礼拝堂と呼ばれる建物さえ知らず、キリスト教セミナーや華やかな説教などは聴いたことがありません。けれども人知れず礼拝する彼らに、神は聖霊の祝福を注がれ、それゆえにその聖徒たちは著しく成長しています。外部からの如何なる情報も遮断され、SNSを自由に駆使することなど決してできないこの国で、1つの灯火を人から人へと分かち合っていくかのように、神の愛は人から人へと伝わっています。

今日だけの礼拝

現在、北朝鮮ではコロナ禍のため、5人以上の集まりは禁止されています。そのような中でも、国内の地下教会は増え広がっています。小さな秘密の地下室で、或いはうっそうとした山中で、北朝鮮の聖徒たちは共に集まり、礼拝することを諦めません。彼らは小さな歌声で賛美を捧げ、息を潜めて祈り、薄明かりの中で御言葉を分かち合っています。礼拝に行くまでの道のりを尾行され、教会が見つかってしまい、そこに居合わせた聖徒たち全員が捕らえられた場合もあります。いつ摘発され、厳しい処罰を受けるか常に危険と隣り合わせです。

けれども、彼らは決して、初めから勇者たちのようにいつも強く、恐れを知らない者たちではありません。彼らも私たちと同じように弱く、恐れを抱え、イエス様がいないと何もできない、塵に過ぎないものたちです。そんな彼らも、また、私たちも聖霊により力を受けてこそ、信仰の勇者となり得ます。今日の礼拝が最後かもしれないとの覚悟の中で、信仰を貫く地下教会の聖徒たちから私たちは何を学ぶでしょうか。もし、私たちの賛美と礼拝が、この地上で捧げる最後のものとしたら、あなたはどのように捧げるでしょうか。またどんな祈りを捧げでしょうか。今日だけの礼拝で、もう明日はないかも知れないと、謙遜に神の御前に膝まずくなら、その礼拝はどんなに変わることでしょうか。真実を尽くし、心から捧げる礼拝者たちに、神がその御目を留めて下さらない筈はありません。

「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。」(ヨハネ4:23)

(つづく)

平壌の見事なマスゲーム

ド イ ツ

1879年創立の現在のCS合唱団

●これまでドイツ最大の合唱団協会であった「キリスト教合唱協会」(CS)は、昨夏幕を閉じました。この協会は1879年に福音派教会のメソジスト教会と福音自由教会を中心に創立され、1898年には、国教会の一部も参加し大きな活躍をしてきました。1970年代、CSには718合唱団と約1万9千人の団員がいました。また旧東独では制限下でありながらも、310の合唱団と約4千500人の団員がいました。CSの背景には“賛美の父”と呼ばれたメソジスト教会説教者エルンスト・ゲプハルト師がいました。CSは長年にわたり讃美歌を歌う合唱団として活躍してきました。1930年には合唱団員数が4万人にもなる最高期を迎えましたが、昨今の団員数は3千人ほどに減少してきました。CS総代表であったベルリン・メソジスト教会のガブリエル・シュトラッカ師は、CS組織は解散したが、今後も合唱団としての讃美活動は続けていくと語っています。お祈りください。

●ドイツ連邦家族省の発表によれば、2020年にドイツ国内で配偶者から虐待を受けた女性は14万8,031人であったことが明らかにされました。これは前年度に比べ約4.4%アップした数字でした。一方、昨年11月末現在で妊娠期間48週前に堕胎された胎児数は、9万2,160件でした。エファマリア・クノーベル夫人(73歳)は、36年前に堕胎した人でした。当時4歳の男児が与えられていた母親は、もう一人子どもが欲しいと願いました。しかし医師団は彼女の心臓移植手術直前に、夫人が妊娠中であることが分かりました。彼女が服用していた薬には、化学避妊薬のような副作用があることが分かりました。したがって、もし胎児が生まれても重い障害が残ることが予想されました。カトリック信者のクノーベル夫人は、そこで堕胎を決心しましたが、現在なおそのことで心痛めています。お祈りください。

クリストッフ・ザウアー教授

●昨年末、「現代におけるクリスチャンへの迫害」という宣教会議が、シュベービッシュ・グムントで開催されました。この大会は2年に一度開かれ、世界各地の迫害と苦難状況の報告と分析が行われました。会議には約350人の専門家と41の宣教団体代表が集い、4日間にわたり熱心な討議が交わされました。会議講演者の一人であったギーセン大学のクリストッフ・ザウアー教授は、「どれだけのクリスチャンが世界で、実際迫害を受けているか信頼性ある数字が大切である。」と語りました。教会とクリスチャンへの迫害は、初代教会時代から続く課題で、約2000年経過した現在もまだ続いています。それは光と闇の戦いであるからです。勝利者は光であるイエス・キリストであると、聖書は述べています。次は会議で報告された一部です。

ローマのマシー・ツエライ司祭は、アフリカ北東部に位置するエリトリアで、クリスチャンは非常な制限下に置かれていると報告しました。エリトリア正教会のアブーネ・アントニオス大司教(92歳)は、15年間も自宅軟禁状態に置かれています。政府公認教会はイスラム教、正教会、ローマカトリック教会、ルター教会の4宗教で、ペンテコステ教会、バプテスト教会、メソジスト教会等は宣教を禁じられています。とくに一昨年からクリスチャンへの圧力と制限は増し、多くのクリスチャンが苦難を味わっています。15歳から60歳までの全国民には兵役義務が課せられ、拒否は一切認められません。共産主義社会から国外へ出ようとする国民が多いのは、そこに理由があると、ツエライ司祭は語りました。

マシー・ツエライ司祭

また会議に参加した国際救援団体「シェルター・ナウ」ウドー・ショトルテ代表は、「アフガニスタンは私たちの祈りを必要としている。」と訴えました。タリバン政権下で社会情勢は悪化するばかりで、女性は再び学校に通うことは許されていません。国内にいる人々は空腹状態にあり、「シェルター・ナウ」は約35万人に救援物資を届けたと報告されました。ショトルテ代表は、「20年前に24人のスタッフが、タリバン政権下で投獄されましたが、その102日後に米軍によって解放されました。神はその時に奇跡を行われたように、今日も奇跡を行うことが可能である。」と証しました。「シェルター・ナウ」は1988年以来、アフガニスタンで救援活動を行っています。お祈りください。

ウドー・ショトルテ代表

イ ラ ン

1979年、ホメイニー師率いるイスラム革命が実現し、イスラム教国家となったイランでは、ここ数年間に霊のリバイバルが起こっています。革命当時のイランでは、クリスチャンは100人以下であったのが今では10万人ほどになっていると言われます。ムスリムがクリスチャンに改宗することは、イスラム教では最も厳しい迫害が押し寄せてくることになります。ムスリムにとって、改宗は本人はもちろん家族も恥とみなされます。したがって公に信仰告白できない聖徒たちは、地下教会の信者となります。彼らはインターネットを通じて福音を聞いていますが、互いに交わりを持つことは難しい状況です。家の教会同士の交わりもできない状況下にありながらも、主の霊は働いておられます。

一例ですが、タヘル兄弟(仮名)はかつて信仰のために独房に投獄されました。2m四方の狭い冷たい独房で、彼は「私はすべてを主に委ねます。イエス様、あなたにお委ねします。」、と神を賛美していました。すると主は、彼の心に言葉で言い表せない平安を与えられました。それは彼が尋問に引き出され、拷問を受ける直前のことでした。彼は主が共におられることを実感し勇気が与えられたと語っています。それにタヘル兄弟の末娘ファラに起こった奇跡は劇的なものでした。彼はドンヤ夫人と、ファラの命にかかわる病気が回復するよう熱心に祈り、親しい信仰者たちに祈りを要請しました。しかし、彼女の病状は悪化する一方でした。気を落としていたところ、あるクリスチャンがファラに手を置き回復のために祈りを捧げたところ、しばらくしてファラは奇跡的に癒されたのでした。迫害の厳しいイランで、神は不思議なみわざを通しご栄光を現しておられます。このように神のわざを通して回心し、クリスチャンとなるムスリムが急増しています。どうぞ、イランの家の教会の聖徒のためにお祈りください。

World View ワールド・ビュー

米　国

ナイジェリア国旗

昨年末、米国外務省はナイジェリアをCPC（迫害度が特に高い世界10カ国）から除外し、ロシアを新たにCPCに加えました。これに対して、米国人権委員会から外務省のアントニー・ブリンケン国務長官に批判の声が上がっています。米国は毎年世界で迫害度が高い国々10カ国を上げて、経済制裁を課してきました。ナイジェリアは2009年以来、信仰の自由がなく迫害度が極めて高い国の一つです。同委員会はナイジェエリアをリストに回復するよう訴えています。また国際人権団体ADFも批判の声を上げ、同団体のショーン・ネルソン弁護士は除外理由が明らかにされてないと語っています。ナイジェリアの現状は昨年さらに悪化し、何千人にものキリスト教徒とムリスムがテロリストの標的とされています。軍隊はテロリストと激しく戦っている状況です。この内乱によって多数の死者が出ており、誘拐事件も頻繁に発生しています。政府にはこの残虐行為を停止させることができないと、ネルソン氏は語っています。数百万人の難民は国内各地に離散し、また外国へ出たりしています。約1万3千のキリスト教会が閉鎖され、そして破壊されました。今回、米国が発表したCPCとは北朝鮮、中国、エリトリア、イラン、ミャンマー、パキスタン、ロシア、サウジアラビア、タジキスタン、トルコメニスタンの10カ国です。どうぞ、お祈りください。

ベラルーシ

かつてソ連邦構成国家の一つであったベラルーシ（白ロシア）は、ソ連崩壊によって同連邦から独立しました。しかし、現在はルカシェンコ政権による独裁が続き、「欧州最後の独裁国家」と非難されています。現在はヨーロッパにおいて代表的な独裁国家で、同時に共産主義の名残が最も強く見受けられる国ともなっています。そのベラルーシの都市ブレストにおいて、聖書展示会が開かれ1,500人以上が来会したと世界福音同盟アライアンス（WEA）が発表しました。展示会はブレスト地方図書館で、現地プロテスタント教会の協力で行われました。WEA総幹事のヨハネス・ライマー教授は、主催は国家の統一をスローガンとして開催されたと語っています。ベラルーシにとっては、彼らの宗教的ルーツと精神的更新は、大きく分裂した社会を救う唯一の道です。どうぞ、ベラルーシのためにお祈り願います。

インドネシア

ダルマヴァン氏

国際人権擁護委員会とキリスト教出版社「イデア社」は、昨年12月の「今月の囚われ人」にカトリック教徒の作家アポリナリス・ダルマヴァン氏を挙げました。彼は元ムスリムでキリスト教徒に改宗した70歳ですが、獄中で7回目のクリスマスを迎えました。昨年12月22日、地方裁判所は彼にさらに5年の刑を宣告しました。彼はイスラム教の異端として扱われています。ダルマヴァン氏は2015年から2020年まで、冒涜罪という犯罪によって服役を強いられました。しかし彼は2020年8月、再度当局へ連行されてしまいました。その時は暴徒たちが彼の家を襲い、彼は路上に引き出され激しい乱暴を受け上着は引き裂かれました。その有様がYou Tubeによって拡散され大問題となりました。彼は何年も前に家族とともに、ムスリムからキリスト教徒に改宗していました。ダルマヴァン氏は2011年、「神への六つの道」という著書を英語版で出版しています。インドネシアは世界最大のイスラム教国で、人口約2億7千万人の約80%はムスリムです。どうぞ、ダルマヴァン氏の釈放をお祈りください。

ポーランド

落書きされたドイツ・ブレーメンの聖マルチン教会

ヨーロッパ、北米、中央アジアの一部において、クリスチャンへの「ヘイトクライム」（憎悪犯罪）は、2020年に増加していたことが、ワルシャワにあるOSZEオフィス（安全と協力のための人権委員会）の発表で明らかにされました。このレポートは昨年11月16日、ワルシャワで開催された国際会議「デイズ・オブ・トレレンス」で公表されました。それによれば、2020年には前年度に比べての犯罪歴は、386件から981件に増加し、65%アップとなりました。その内56件が身体への暴力行為、55件が脅迫行為、871件が財産問題に関するものでした。その中には礼拝堂の破壊や破損、放火、そして教会墓地の破壊などが含まれます。反ユダヤ主義的な「ヘイトクライム」も前年度に比べて、同じく2,021件から2,316件に増加しました。それに反して対ムスリムへの「ヘイトクライム」は511件から333件に減少しました。OSZEオフィスのマテオ・メカシ事務長は、「この他、表に出ていない事件もある」と述べ、クリスチャンへの「ヘイトクライム」は、今の時代を現していると語っています。お祈りください。

ミッション・宣教の声 *The Voice of Mission*

〒541-0041 大阪市中央区北浜2-3-10 VIP関西センター 5F
TEL06-6226-1334 FAX06-6226-1336
E-mail senkyo@vomj.jp http://vomj.jp/
発行人　黒田禎一郎
年間購読料　¥2,500（送料込）

郵便振替口座　00940-3-301623
銀行口座　三菱UFJ銀行　堺東支店（店番205）
普通口座 3623132「ミッション宣教の声」

The Voice of Mission
MUFG Bank,Ltd. Sakaihigashi Branch
Bank account No.3623132 SWIFT CODE : BOTKJPJT
Bank Address : 59-2 MIkunigaoka-Miyukidoori,Sakai-ku,
Sakai-shi,Osaka-fu 590-0028 JAPAN TEL:81-72-221-3041

編集後記

■日本では年間を通じ最も厳しい季節を迎えています。その上オミクロン変異株が流行っていますが、いかがお過ごしでしょうか。主のお守りがありますように！

■世界情勢を謙虚な心で眺めるなら「世界のぶどう畑」は、今や収穫の時を迎えていることは明らかです。キリストの福音が読者の皆様を通し、さらに宣べ伝えられますよう祈ります。

■「ミッション・宣教の声」は、主様のあわれみで創立40年を迎えました。心新たにキリストの福音を伝えていきます。いつも祈り覚えてくださる皆様に心から感謝しています。マラナタ。

1981年12月初版発行（毎月1回1日発行）